

# 「どう働くのか？」

## ～なぜ働くのか？～

I テモテ 6 : 1 ~ 1 2

### みなさん…

みなさん、今、自分がやっていることの意味が分かっていいますか？「今やってる仕事大丈夫？」「今のままでいいの？」が頭に浮かんだ時、「自分のおかれた場所は間違っているんだ」「自分が悪いんじゃないくて環境が悪いんだ。周りが悪いんだ。」と仕事を換えようと思ってしまうことがあります。一生懸命、熱心にやっても何だかうまくいきません。…そうすると、「この場所が悪い」と思うことは世の常です。帝国ホテルの元総料理長だった村上信夫シェフを知っていますか？日本で最初に洋食を家庭に広めた「洋食業界で知らない人はいない」と賞される方です。村上シェフは見習い時代3年間ずっと銅の鍋洗いをしていました。ただひたすら磨き続けたのです。厨房では細かく指示はされません。「あなたは皿を洗いなさい」と言われれば、それで終わりです。見習いシェフは、皿に残っているソースをなめて先輩方の味を勉強します。シェフの世界は厳しいです。先輩シェフは後輩に味を盗まれまいと、わざと皿や鍋に洗剤を混ぜて味を覚えさせないようにするそうです。村上シェフもそうされました。しかし村上シェフはここで諦めたり怒ったりしませんでした。「どうせ磨くなら、誰よりも徹底的に美しくしよう。フライパンや鍋を輝かせよう」と一人黙々と仕事をやり続けました。すると先輩シェフは厨房機器が美しく磨かれていることに気づきました。銅の鍋やフライパンを輝くまで磨き上げる大変さを先輩方は知っています。それを村上シェフが一人黙々とやり続けたことを知って先輩方はその日から「彼にソースの味くらい覚えさせてやろう」と、村上シェフに対して、味が盗まれないようにすることをやめたそうです。村上シェフが見習いをはじめてちょうど3年がたった時だったそうです。ここから彼はどんどん出世して総料理長を務め、勲四等瑞宝章受章もしました。彼は、何も教えてもらっていません。自分で考え、自分から行動したのです。彼は「自分は多くの人々を喜ばせる料理が作りたい」という思うで働いていました。だから、そのために自分が何をしなければいけないのかを理解していました。

### 今日は…

今日は「どう働くのか、なぜ働くのか」を考えたいと思います。この「働く」を辞書で調べてみると諸説ありますが、「傍（はた）を楽にする」だともいわれています。「はた」というのは他者のことです。他者の負担を軽くしてあげる、楽にしてあげる、というのがもとの「働く」の意味だったんです。この「働く」方法によって結果は様々です。イエス様のそばで懸命に働いた弟子の一人にイスカリオテのユダがいます。全てを捨ててイエス様について行きました。しかし、イエス様がユダだ考えていることとあまりにも違うことを行うので嫌になりました。そして自分の考えで働きました。パリサイ人のところへ行き銀貨30枚でイエス様を売ったのです。ユダは「もしもイエス様が十字架にかかるような窮地に陥れば、自分の考えているような世界を大きく変えるような大々的な救世主としての働きを行ってくれる」と、考えていたのです。ユダの働きは自分の方法や考えでした。ユダよりも前に神さまの考えに背いて自分の考えで働いた者がいました。それはアダムとエバです。神さまが食べてはならないと言った木の実を食べてしまいました。結果、アダムは「苦しんで食を得なければならぬ」「顔に汗をして糧を得る」ようになってしまいました。今、私たちは働く理由をこの誤った価値観から元の「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ」と神さまから命じられている命令に戻さなければなりません。使徒の働き3章にペテロが生まれつき足の萎えた人を癒やす、美しの門での記事が書かれています。物乞いをしている足萎えの人にペテロは「金銀は私にはない。しかし、私にあるものを上げよう。ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい。」と言い癒やしました。するとその人は、歩いたりねたりしながら神を賛美しつつペテロと共に宮に入ったのです。一見、ペテロが癒やしたのは足に見えますが、実は心です。生まれつき足の萎えた人に生きる希望を与え、人生を180度

変えたのです。パウロは今日の聖書箇所、一見、奴隷制度を肯定しているようなことを言っています。しかし、奴隷制度に賛成してはいません。パウロの使命は多くの人々を救いに導くこと福音を伝えることでした。ですから、パウロは奴隷の人たちに、たとえ主人が悪い人だったとしても、あなたがそこでクリスチャンとして仕えるなら、その悪い主人があなただけを通して変えられ、その主人が多くの人々を変える働きを行うんだ…と一言を伝えているのです。イエス様の働きと同じです。イエス様は常に「社会」に働き変えていたのではなく、「個」に働きかけ、その人の心を変えてきました。私たちの心が変わると世の中が変わるのです。だから神さまがなぜ私たちを選んで、この場所に使遣わされているのかを理解して、この場で輝いていなければいけません。

### 心を変える働き…

ですから、私たちの働きは①心を変える働きでなければいけません。パウロが選んだ生き方は、いつも一人・個に対して心を変える働きに徹するものでした。前述も奴隷制度を肯定したのではなく、奴隷制度を変えることができるように個に働きかけたのです。今は、奴隷制度はありませんが、職場にあつて私たちは労働者です。労働者が自らの思いと意思を持って働き、一人の人間がしっかりとした価値観を持って働けば、神さまはその一人の人間を通してその場全体を変えることができるのです。ヨハネの福音書4章にサマリアの女の記事があります。イエス様は彼女の心を変える働きをされました。その結果、この女性が自分の変わった姿を通してサマリアの人々にイエス様のことを伝え、サマリア全土が救いへと導かれました。私たちの言葉や行動が個々の心を変えるものでなければいけないのです。そのためにIテモテ6:6にあるように敬虔であるべきです。敬虔こそ大きな利益をうみます。

### 能力ではなく人格による働き…

それには、②能力ではなく人格による働き…それは「愛」が必要になります。この世は能力社会です。能力がない人は切り捨てられる世の中です。しかし、能力は、私たちが遣わされた地で神さまが私たち一人一人に与えてくれた賜物を用いて輝いていれば、自然に発揮されるものです。この賜物は愛に生き、御言葉を携えて生きていけば自然に光り輝きます。自分の理屈を通すために相手を裁いたり、自分より劣る人を見て優越感を感じていたのでは愛がなく、賜物を輝かせることができず、能力も発揮することができません。Iテモテ6:10-11とIコリ13:3～8に愛について書かれています。「すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを堪え忍び、決して絶えることがない」のが愛です。これを実践することが働くことです。何か問題のある人にであつたら、その人と向き合つて絶対に見捨てないでその人に仕えることが働くことです。

### 知恵による働き…

そして、それは③知恵による働きをしないと成りません。良いことを伝えたかったら、知恵を持って発言・行動しなければ、相手を裁いたり傷つけてしまつて伝わりません。人は変わりません。①のポイントと併せて気をつけなければいけません。知恵による働きをしないと心を変える働きができないのです。ですからソロモンのように知恵を神さまに求めましょう。ソロモンは知恵を求めました(I列王記3:7～9)。すると神様は「知恵の心と判断する心」をお与えになりました(I列王記3:11～12)。「神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます」(マタイ6:25～33)と書かれているとおりです。私たちが知恵を持っていれば必ず祝福されて豊かになります。この豊かさを人々のために使つて個々の心を変える働きを行い、自分の役割を果たし、結果、多くの人々をつくり変える働きをしていきましょう。

(要約者:行司 佳世)